
ぼくのさくら

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくのさくら

【コード】

N3709H

【作者名】

佳生

【あらすじ】

今年は雪が降ったんです。桜の季節に雪が降りました。

(前書き)

微妙に実話が混ざっています。

それは本州最北。白神の山の向こう。桜の名所である城の近く。

少しばかり山になっている道脇にあった、三・四本の桜の話。

「今年も綺麗に咲いたね」

春。その桜達は、去年と同じ様に、けども去年と違う花を揺らす。

暖かい日。家の目の前にある木に笑いかけ、齡十ばかりの少年が微笑んだ。生け垣を背にして、少し見上げる形になる桜は、沢山の花びらを舞わせる。

3

「今年はどうくらい咲けそう？ 雨が降らなければ良いね」

さわさわ、と風に揺られる桜は、分からない、と答えたように思えた。

丘の上には、城の桜を見に行こうとする人の列が出来ている。

「お城まで行くんだらうね、皆」

ぼんやりという彼は、まだ細身の桜を見て肩をすくめた。

「大丈夫。あと何年かしたら、お城の桜に負けなくらい、綺麗で立派な桜になれるから」

さわさわ、さわさわ。

まだ若い風の桜。彼と同じく、まだ未熟な桜。

「産まれた時から見てるんだ。分かるよ大丈夫だって、自信持ってる！」

にかつと笑って、桜に拳を付き出した彼は、さわりと鳴った桜に満足して、その足元にまで歩く。

横になってみたけれど、大した日除けにはならない。枝が短いからだ。

それでも関係なく、彼は手を伸ばして、花を指でなぞってみたり、落ちてくる花びらを掴んでみたり。

「姉妹揃って綺麗になるぞ〜」

さわさわ、さわさわ。

桜は小さく囁くだけ。

八年して、少年は十八歳になって、桜も立派に枝を広げるようになった。

春。大きく腕を伸ばし手を広げ、たわわに花を咲かせた桜は、城の桜にも負けないくらいに桜になっていた。

お城の桜を見にきた人達は、そこに行くまでの疲れを、この場所で癒す。

「本当に綺麗になった」

一本一本、手で触れて、彼はにっこりと笑う。昔の面影を残しながら、けれども穏やかに。

彼は、この十八年、桜と共に育ってきた。

「僕の言った通りだろ？ とっても綺麗だよ」

さわさわ。

同じことを何回も言わないで。分かったから。

呆れた様な、あやすような。桜に寄り添って立つと、木の下に花

をつけた枝が肩口ほどにある。

だから、その枝の花は、いつも彼の首をくすぐっては揺れるのだった。本当に、可愛い、小さな花。儂くて、脆くて、幻想的な。

その根本に横になり、彼は真上の空を見上げる。薄い桃色に遮られて、チラチラと、欠片ほどしか見えない蒼。

胸一杯に甘い、けれどもしつこくはない、桜の香りを吸い込んだ。心が安らぐのは、きっと桜が優しいから。

さわさわ。さわさわ。

風に揺られて、花びらを舞い落とす。

近くを通りかかっていた少年や少女達が、走り回りながら花びらを掴もうとする。

「僕も昔やったよね。……あの時は、君がちゃんと僕の手においてくれたっけ」

ハラハラと散る、一片の桃色。走り回って追い掛けても、一つだつて掴めなかった。そんな彼に、桜は、一つ、花を落とした。

水を受け止める時のように、両手で器を造ると、その中に、一つ、桜の花が舞い落ちた。

「嬉しかったよ」

そう微笑む彼の胸元に、桜の花が落ちる。

「……ありがとう」

手を振るようにした彼に、桜は小さく微笑んだ。彼には、そう思えた。

しかし、そんな日々は唐突に終わる。それは夏の始まりの日。

「……え」

それしか、言えない。

桜の木がない。

「どうしよう、こと」

無惨に残った切株。痛々しい傷。姉とも母とも思えた桜は、その日をもって、彼の前から、姿を消した。

その桜を植えたのは、彼の家の近所に住む老人だった。

老人は桜が好きで、自宅の前にも桜を植えていた。そして、あの丘にも、三・四本の桜を植えたのだ。

長い年月をかけ、成長した桜は、やがて産まれた彼と時を刻み始める。

そして最後の日。桜を切るように言ったのは、老人だった。

老人は、自分の命が短いを感じ、誰か桜の面倒を見てくれるものを探した。地域の管理人達も訪ねた。しかし、誰も引き受けなかった。

今まで、道に桜が枝を広げなかったのも、病気をしなかったのも、

美しく綺麗であったのも、全てその老人のおかげだった。

けど、自分がいなくなった後には、一体誰が面倒をみてやるのか。それに考え付き、誰も手を差し延べなかった時、桜の運命が決まった。

そうして切ってしまった後に、『どうして切ったのか』と、管理人達が言ってきたのだ。もう遅い。桜は、無い。

丘の見晴らしがよくなってから、ようやく春が訪れた。

丘のこちら側にある桜の姿は相変わらず、切り株だけ。だが、向こう側には、立派な桜の木が見える。

どうして彼女たちだけが、こうなってしまったんだろう。

切なさに目を細めても、そこに咲くはずの桜はない。切り株から、新しい芽が出て、花を咲かせてくれまいかとも思ったが、それもなかった。

彼女らを写真片手にそこに寝そべてみても、あの日の思い出がよみがえるばかりで、抜けるような空と太陽が目を刺す。あの柔らかな桃色の世界はない。

夏になれば、丘の草が切り株を隠してしまふ。そうすれば様子を見るのも容易ではない。だから、今のうちに、側にいてやるうと思ふ。彼女らはもういないのかもしれない。花なんて咲かすことが出来ないのかもしれない。

けれど、本当にそうなのか分からない青年は、分からないまま、そこに居続ける。気がつけば声をかけて笑いかけてやる。

答えてくれる梢の囁きはなくても。

さらに二年が経ち、青年は二十歳を迎えた。雪で覆われてしまつて、どこが切り株であったのか分からないが、青年はその丘の前に居た。

向こうにあるのは雪を花のように見せる桜の木。こちらには、何も無い。何も無いのが、つらかった。

今は冬。終わりの季節。彼女らが居なくなつて、一度は経験した

はずの冬。

自分はここで立っているのに、どうして彼女らは居ないのだろうと思う。冬の日に見上げた、黒い枝に白い雪を飾って、灰の空に両手を広げていた彼女たち。下を歩く子らに雪を落としていたはずらしていた、遠い冬の日。

全部が、思い出だった。

あの頃は、二十歳になったこの日も、彼女らに向かって笑っていると思っていた。大人になったよ、と、笑っていると思っていた。

たかが桜の木じゃないか。そう言われたことだってある。でも、たかがじゃなかった。そう思いたくても、思えなかった。ずっと見えてきた。ずっと見守られていた。

綺麗だった。

これはきつと、恋ではないけれど、青年は、彼女らが、あの桜の木が好きだった。大好きだった。

早く冬が終わればいいのに。

青年はそう思って、丘を後にした。

その年の冬は長かった。暦では春なのに、雪が解けない。だがそれも終わり、春がやってきた。

城の桜や、丘の向こう側の桜が咲き始めている。けれども、今年も、青年がたたずむ丘の桜は咲かなかった。緑の葉っぱが見える気がするが、それが桜の葉なのか、それとも下から生えているただの葉なのか分からない。

青年は、そこに近づけなくなっていた。遠くから見るしか出来なかった。

ほんの少しの段差と、斜面と草たち。たったそれらのためだけに、青年はそれ以上進めない。

観光の人間がわいわいと丘の上を行く中、青年は丘の下で、切り株を眺めている。

来る日も来る日も、そうして切り株を眺めていた。誰も気にしない。きつと、桜の木があったことも忘れてしまっているだろう。向こう側の桜を見て、昔はこちら側に向けていた笑みを浮かべる。

誰も見なくとも、自分は見ているよ。

そう心の中で思っていた。

今年の冬は長かった。だから、今年の春は短い。

ハラハラと桜が散ってゆく中、桃色よりも緑色の木が目立つようになっても、観光客が居なくなっても、たとえ春がもう過ぎていこうとしていても、青年はそこに立っていた。

本当に春が終わるまで、青年は彼女らが小さな答えを返してくれると信じていた。どんなに小さくても、いいから。

そして、全ての桜が散ろうという、張る最後の日だった。

青年は、その日も丘の前に立つ。向こうから飛んできた桜の花びらが、彼女らの上に乗っていた。

悲しげに目を細める青年は、一つ、段差を上った。それから、斜面に足をかけて、草を分ける。そして、一番大きな切り株の前まで来て、そこに、腰を下ろした。

少し高くなって、見晴らしがいい。

小さくため息をついて、切り株に触る。ざらざらしていた。でも、どこか安心できた。懐かしい感じがして、ため息ではなく息をつく。

そうして、しばらく座っていた青年は、ふと、上着から写真を取り出した。

一番最後にとった、彼女らの写真。

一番美しく、一番輝き、一番大きかった、柔らかな花を称える彼女たち。

もう一度、もう一度だけ、あの日の春を感じたい。

写真を持つ手に、小さな力がこもる。

と、青年の目の前を、白い何かが横切った。ひらり、と、何かが驚いて顔を上げると、また、白い何かが横切る。

そして、手に、冷たい感触が。

「……」

春の終わりに、雪が降った。

桜の花弁と一緒に、雪が降っている。はらはら、ひらひら。雪が。

冷たい風が首を撫でる。あの日の桜は暖かった。けれども、この風は、同じようにしながらも冷たい。

桜じゃ、ないから。

それでも、桜と同じように、柔らかくひらひらと舞う。風にさらわれて、地面に落ちる。すぐに消えてしまっけれど。

「泣いてないよ」

花びらのように振る雪が青年の頭や顔に当たって、水に変わる。

ふわりと自分の前で巻いた風に乗る雪が、頬を撫でた。冷たい。冷たいけれども、嫌いになれない。

冬なんて早く終われと思っていたのに。

桜みたいに綺麗で、とても儂い、雪。

今年は、桜の季節に、雪が降った。

そして、それは、去年は桜の季節に雪が降った、に変わる。さらに、一昨年は、に変わる。

それから何度季節が巡っても、青年はずっと待っている。今年は小さな芽が出るだろうか。今年は雪が降るだろうか。

彼はずっと、待っている。何年も何年も、ずっとずっと、例えばそれが叶わない事でも、桜が咲くのを待っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3709h/>

ぼくのさくら

2010年10月12日08時06分発行